

読書通信



No. 197

① 「歴史探偵」が亡くなって半年。半藤一利『戦争というもの』（PHP研究所、1430円）は「記憶に残したい太平洋戦争名言集」とでもいふべき、いかにも著者らしい遺著である。著者の戦争嫌いは東京大空襲で九死に一生を得た少年期の体験から来ているので筋金入りで、最後の最後に軍人など有名無名人37の名言を選び一冊にまとめようとした。しかし体力、気力尽きて14でストップ、実現したのが本書である。

「沖縄県民斯く戦へり」（天田実）、「一に平和を守らんがためである」（山本五十六）、「敗因は傲慢

題を考え直すきっかけにもなる。

安倍前首相も逃げ切ったと思っている一人なのだろうが、看板だった「女性活躍社会」など事實上、何もできずに退陣に至ったことは著者の分析どおりだし、昨年4月の会見でイタリア人記者から「コロナ対応が失敗だったらどうする」と問われて「私が責任をとればいいというものではない」ではありません」と返した話が紹介される（当分、忘れてはならぬ迷言だろう）。歯に衣着せぬ著者のしつこさには学ぶべきところも多い。

③ 日本人はジョークは苦手だ。しかし身の安全を図りながら絶対権力に厳しく迫るにジョークに勝るものはない。で、名越健郎『ジョークで読む世界ウラ事情』（日経プレミアシリーズ、990円）は大いに楽しめる。「米国で新型コ

の一語に尽きる（草鹿龍之介）、「理想のために国を滅ぼしてはならない」（若槻札次郎）から「バスに乗り遅れるな」（流行語）、「タコの遺骨はいつ還る」（流行歌）など、著者の絶筆は寸鉄で刺すのごとく鋭い。あと23本は直筆の企画書として本書に掲載されていて実現していればと惜しまれる。末利子夫人と孫の北村淳子氏の解説もい。

② 偉い人ほどウソをつく。そして逃げまくる。「このまま忘れてもらおう」作戦に引つ掛かってたまるか。そう憤慨するのが武田砂鉄『偉い人ほどすぐ逃げる』（文藝春秋、1760円）である。『文藝界』にここ数年、連載してきた43のエッセーを政治、社会、五輪、言葉、メディアの5テーマに再編成した。やや旧聞に属する話もあるが、それだけに忘れかけていた大事な問

ロナ患者が爆発的に増えるとメキシコの大統領がトランプに電話した。国境の壁の建設を急いでほしい」「憲法をめぐる日口の違い。ロシアではプーチンが好きなように憲法を変える。日本ではアベが好きなように憲法解釈を変える」。ジョーク（政治川柳もだが）は庶民が権力と対等に立ち合うための大切な武器である。

④ 印象派とくにモネ好きには原田マハ『モネのあしあと』（幻冬舎文庫、550円）を。印象派の誕生は革命だった。モネも苦勞の連続でジヴェルニーの庭を今、楽しめるのは偶然が重なったから。日本に居ながらたくさんのモネ作品を鑑賞できるのは松方幸次郎、大原孫三郎、薩摩治郎八など目利きの先人たちのおかげだ、等々。モネ愛にあふれた佳作である。（浅野 純次）